

平成16年度心の教育を考えるシンポジウム (概要&主な意見)

第1部 基調講演 演題

「豊かな心を育むために」 — 治療的発想から教育的発想への転換 —

(概要)

- ・ 心の問題をかかえる子供に対応すること（＝治療モデル）と、子供の心を育てること（＝教育モデル）は、全く異なる行為である。両者を混同してはならない。
- ・ 子供の心に関する問題が発生した時は、対症療法的な即効性のある方策が期待されることが多いが、これは失敗の歴史でもあった。
- ・ 心の問題の専門家（＝カウンセラー）と心を育てる専門家（＝教師）は役割が別である。両者の役割分担を混同してはならない。この誤解が、カウンセラーに任せておけばよいといった姿勢を生む元になっている。
- ・ 学校は病院ではない。治療的手法では子供の心を育てることにはならない。
- ・ 人間関係づくりは教師主導ではなく、子供自身がする行為である。子供自らが大人の支援を得て、「絆づくり」を行うのである。
- ・ 「心の居場所」とは自分が大事にされている、認められているという存在感、充実感が実感できる場所である。これは子供のためにと、大人がつくってきたものであった。
- ・ この約10年間は、国の施策も含め、この「居場所づくり」をすれば何とかなる、学校へ来てくれればよいという思いに駆られ、豊かな心を育むことを忘れ、ある意味ぬるま湯の中で治療の真似事をしてきたのではといった思いがある。
- ・ 子供に「自己有用感」を感じさせる指導こそ大切である。一方、「自尊感情」（セルフエスティーム）は両面性のある言葉である。例えば、いじめの加害者は自尊感情が高いケースが多い。この言葉は自己肯定感、自己有用感とは区別して考えるべきである。
- ・ 「自己有用感」を感じさせる指導は褒めて育てる指導である。子供にとって日常直接関係のある親や担任から褒められてもさほど感動はない。よその先生（第三者として）から褒められるととても嬉しいもの。この点こそが重要である。
- ・ 例えば、6年生が1年生を世話することは、6年生に自己有用感を育てるために行う指導である。「縦の関係」で自己有用感を育てる取組を学校全体で行うことがよい。

第2部 パネルディスカッション

(主な意見)

- ・ 心の定義は難しい。日常レベルでは「気持ち」ということになるか。相手の気持ちが理解できること（＝「思いやり」）、親から愛されていることを感じる、皆の中で自分の気持ちを表せることが大切な点である。
- ・ 「けんかして仲直りする」ことの体験が今の子にはほとんどない。この体験の大切さを教えたい。
- ・ 万引き等の小さい犯罪行為を本人だけでなくその親までが、「みんなやっている」、「たいてい悪いことではない」と捉えている風潮は非常に気になる。
- ・ ドイツの家庭教育の基本は子供を半人前の存在として扱うことである。ものを大切にすること、人にものを頼む時の態度や言葉遣い、大人の邪魔をしないことなど徹底して教え込む。
- ・ 子供は本来、半人前である。子供を一人前にすることが大人の義務なのに、これを理解していない大人が多い。
- ・ 半人前だからだめというのではなく、「まだ君は半人前なのだよ」ということを子供にわからせることが大切である。
- ・ 大人が豊かな心を持っていなければ、豊かな心をもつ子供の育成がどうしてできようか。大人の姿勢があらゆる場面で問われている。

- ・ 今は大人自身が**閉塞感**を強く感じている時代である。こういう時代だからこそ、子供には**夢**をもたせたい。
- ・ 高校生の年齢になると、心の問題は顕在化してしまう。小学校ぐらいまでの時期のしつけはやはり大切である。この点、高校の先生は大変だと思う。
- ・ 今の子は**間接体験**に浸かっている。裏をかえせば**実体験の少なさ**である。表情が見えない、文字でしか思いが伝わらないネットの世界の恐ろしさを感じる。
- ・ 「物と心」、「個人と集団」、「進歩と伝統」のいずれも、その**あるべき調和**が崩れてしまっているのが現在の日本である。(心がモノに囚われている時代、校則バッシングと個人の自由の勝手な解釈、進歩=よいもの・伝統=古臭いものという一面的な解釈)
- ・ 最近では、いきなり「訴訟を起こす」、「弁護士を呼ぶ」といった突然の一方的な相談が時にある。大人の姿勢に問題がある場合が多い。真に「子供のために」という視点があるのか。
- ・ 子供の心を蝕むものが今の社会には多過ぎる。子供は現代社会の生んだ犠牲者とも言える。大人の責任は大きい。
- ・ 「理解ある親（教師）」も度を越すと問題だ。「**壁**」としての**存在**も必要である。「胸を貸す」大人の存在は重要である。「理解ある親をもつ子はたまらない」ということも起こりうるのだ。
- ・ 学校における指導では、同僚の職員が**第三者**としてどうかかわるかが非常に大切である。ここの連携プレーが悪い場合が多い。例えば、ある生徒に対して、一生懸命指導に当たっているA先生のことを別の先生が「(A先生は)君のことを真剣に考えて指導してくれているのだよ」という様に、しっかりフォローするような姿勢が大切である。
- ・ 最近では家庭自体がすでに崩壊し、母親自身が「自分を支えてほしい」と訴え出るようなケースも多い。
- ・ 日本の美しい唱歌が次々に教科書から消えている。美しいもの、先人の残してくれたものに触れて感性を磨く機会がますます減っている。
- ・ 子供に対しては、親、教師、地域が**愛情と関心**をフルに注いでやる一方で、だめなことはだめという**毅然とした姿勢**で対応することが基本である。
- ・ 大人が生き生きとした姿を子供に見せ、「ああいう大人になりたい」という**憧れ**を抱かせるような存在にならなければいけない。